

第20回全国大会 (2020年11月28日(土)、Zoom開催)

要 旨

I 研究発表

第一室

1. ウィリアム・モリスの工芸論における宗教性について
——ジョン・ラスキンからの影響を中心に

島貫 悟(東北大学大学院)

1934年にウィリアム・モリスと柳宗悦の工芸論を比較した壽岳文章は、柳の工芸論には宗教的な深さがあるのに対し、モリスの工芸論には宗教性がないという理解を示したが、この理解の妥当性は未だ十分に検証されていない。本発表ではまず、モリスの工芸論に多大な影響を与えたジョン・ラスキンの「ゴシックの本性」においては、工芸論と宗教思想が密接に結びついていることを、ラスキンがゴシック芸術の特徴として指摘した「荒々しさ」と「自然主義」という概念を中心に検討する。その上で、モリスの工芸論の中心的命題である「芸術とは人が労働のなかで感じる喜びの表現である」という言葉が、ラスキンの宗教的主張を踏まえたものであることを確認し、さらに、モリスのデザイン論には、ラスキンのキリスト教理解と結びついた「自然主義」が受け継がれていることを示す。以上の考察から、モリスの工芸論には言外の宗教的奥行きが存在することを明らかにする。

2. オフィーリアとセクシュアリティ——女性作家メアリ・カウデン・クラークのオフィーリア像をもとに——

風間 彩香(新潟大学博士研究員)

オフィーリアは原作では清純さとエロスを併せもつ存在であるが、18世紀以降は専ら清純無垢な存在とされ、一方で近年の表象では性的な側面が強調されており、そのセクシュアリティをめぐる揺らぎが見られる。

性に抑圧的であったヴィクトリア朝において、オフィーリアを性との関連でとらえたのが、フェミニスト作家 Mary Cowden Clarke (1809-98) の前日譚小説であった。本発表では、Clarke のオフィーリア像を、ヴィクトリア朝の女性観や小説に求められた社会的役割、性に関する言説の中で考察した。それによって明らかになったのは、Clarke が造形したセクシュアリティをもつオフィーリア像は、家父長的女性像と格闘し新たな女性像を切り開いた同時代の女性作家たちの試みに連なるということであった。一方で、Clarke は性との関わりこそが原作での悲劇的運命の要因と解釈し、オフィーリアを異性に性的感情を抱いたために身を滅ぼした反面教師として女性読者の教訓素材とした、という Clarke のオフィーリア像が内包する両義性を提示した。

3. 後期ヴィクトリア朝文芸誌上に辿る著作権意識とプロフェッショナルリズムの高まり

麻島 徳子 (大阪成蹊短期大学)

従来、文芸作品の知的所有権をめぐる議論において、批評家が注目する時期は18世紀と20世紀後半に偏っていた。その理由のひとつには、18世紀は近代的な著作権法の基礎が固められた時期だったからであり、もうひとつには、20世紀後半が技術革新による情報化社会における著作権のあり方を再考する時期だったからである。それに対して、19世紀から20世紀初頭に注目する議論は「乏しい」と指摘されている (Saint-Amour 14)。本発表では、文芸市場の大衆化が加速した1880年以降の後期ヴィクトリア朝という時期に注目し、1884年にウォルター・ベザントによって創設された「作家協会」が刊行する協会誌 (The Author) 上での作家の権利をめぐる議論を起点として、他の文芸雑誌記事での議論と関連づけながら、この時期に作家の権利意識がどう変化していったのかを辿った。そして、そうした議論は、著作権法の基盤となったロマン主義的な「天才」による創作という意識を、大衆化していく文芸市場における作家の意識改革を阻むものとして問題視し、市場に向けて執筆する「プロフェッショナル」としての

新たな権利意識を掲げようとするものだったのではないかと結論づけた。

第二室

1. 「障害者」像に潜むジェンダー — *The Moonstone* における「障害」の克服と限界

後藤 千宏 (学習院大学大学院)

本発表では、Wilkie Collins の *The Moonstone* (1868) を Disability studies の観点から読み、先行研究で看過されてきた Rosanna Spearman (Lucy Yolland) と Ezra Jennings の語りにおける権威の強さの違いを考察した。本作品は、作中で身体「障害者」として扱われる Rosanna や Jennings の語りを本文の中に組み込むことで「健常者」の語りを相対化し、「健常者」「障害者」の二項対立の境界を不安定なものにしようとしている。しかし2人の語りには、権威の強さという観点から相違が見られる。Rosanna の手紙は Franklin Blake の語りの大枠の中に組み込まれている一方、Jennings の日記は独立した章になっている。また、Rosanna の手紙は彼女の誤った推測を提示する一方、Jennings の日記は彼女の間違いを訂正して真相を明らかにし、事件の解決に貢献する。Franklin によって編集されているこの作品世界は、ヴィクトリア朝中期社会の男性中心主義を表す。本作品は「障害」を克服できる可能性は男性的な特権であること、それゆえジェンダーによる制約が存在することを示していると結論付けた。

2. 悪夢の語り：ロバート・ルイス・スティーヴンソンの印象主義的技法 守重 真雄 (駒澤大学(兼))

19世紀後半に活躍した作家ロバート・ルイス・スティーヴンソンは、印象主義の先駆的作家であるヘンリー・ジェイムズと深い親交があり、絵画にも強い関心をもっていた。それにも関わらず、英文学における印象主義研究は20世紀以降の小説に集中しており、19世紀の作品についてはいま

だ十分とは言い難く、殊にステイーヴンソンを論じたものは世界的にも極めて少ない。そこで本発表では、ステイーヴンソンの執拗なリアリズム批判を1880年代のエッセイを中心に概観した上で、そのような小説観を形成する上で重要な役割を果たしたのが日本美術であったことを指摘した。発表後半では、傑作『ジキル博士とハイド氏』(1886)において、彼の絵画的表現、つまり「反リアリズム」的表現が随所に見られることを確認した後、小説の語りが美学的になるときは登場人物アタソンが悪夢を見ているときに他ならず、彼の曖昧で不確実な心の「印象」が語りとして漏れ出していることを論証した。

3. 葬儀から読む『オリヴァー・ツイスト』

込山 宏太(青山学院大学)

チャールズ・ディケンズは遺言書に自分の葬儀では過度な礼服を禁ずると銘記し、「死の商売」と題するエッセイでウェリントン公爵の国葬を「見世物」だと断じるなど、死がモノへと矮小化される同時代の葬儀を痛烈に批判した。彼が理想としたのは虚飾を排した密やかな葬儀であった。本発表では、葬儀という観点から『オリヴァー・ツイスト』(1837-39)を考察した。物語冒頭における母親の死や葬儀屋での奉公体験の描写のうちには、ディケンズが批判した葬儀と同様の、死をモノへと矮小化し早急に忘却するメカニズムが働いている。一方、母親との墓石と向かい合う終結部は、彼の理想とした密やかな葬儀と照応している。しかし同時に、こうした母親の理想の葬儀という物語の完結性が、「葬儀」と名指される処刑を前にしたフェイギンの凄絶な死の拒絶によって切り崩されてもいることを、最終章直前のオリヴァーとの邂逅場面を分析することで明らかにした。

II シンポジウム

シンポジウム1

「芸術のための芸術／世界のための芸術——開かれた唯美主義の形態」

産業・経済・科学・思想の急速な発展をみたヴィクトリア朝に、一途な美の追求により芸術・文学に寄与した「唯美主義」者たち——ラファエル前派やその周辺の芸術家たち——は、たんに外界に背を向けていたのではない。美を追求しながらも、又、追求するがゆえに、時代思潮に敏感に反応し、共鳴・反発しつつ、芸術家としての存在の在り方を模索し、真理を追究していた。本シンポジウムでは、ヴィクトリア朝期の唯美主義的傾向を持った芸術家たちの、社会や時代精神に対する立ち位置に光を当て、彼らが時代の支配的な価値観との相克の中で、いかに外界と対峙し、作品を生み出したかを考察した。彼らにとって、美と社会性／外界への関心は相互に内包しうるものであった可能性を提示し、様々な開かれた唯美主義の有り様にみられる「非実用の有用」の逆説の意義を問い直すことで、現代にも通ずるヴィクトリア朝の一面を浮き彫りにした。クラインの壺のように、唯美主義は究極的には開かれていたのだ。(企画立案：加藤 千晶)

唯美主義運動の「大義」——ウォルター・ハミルトン著『英国の唯美主義運動』(1882年)をめぐって

司会・報告：川端 康雄(日本女子大学)

ウォルター・ハミルトンの『英国の唯美主義運動』は、唯美主義運動が継続中であった1882年に刊行された先駆的な著作として、研究史的な意義がある。その記述にはある種のスノビズムと凡庸さがあり、それが同書を名著とするのを妨げているのだが、諸芸術の総合(への志向)を同運動の肝ととらえて、唯美派の仕事を一般読者にむけて解き明かした功績は高い。本発表では、刊行当時の文脈を押さえつつ、本書の再評価を試みたい。本書のエピグラフにウィリアム・モリスの講演の「大義」をめぐる一節を掲げている点は、「開かれた唯美主義」を考察する際のヒントとなるのではな

いかと思われる。

モリス商会の設立と職工たち——美を伝えるということ

報告：横山 千晶(慶應義塾大学)

1846年初版の『近代画家論』第二巻をラスキンは1883年に再出版する。その目的の一つは、当時の唯美主義的な趣向と自らの距離を強調することであった。ラスキンは動物的な快感(エッセーシス)と道徳的な美的感覚(テオリア)を区別し、観察力の訓練と実地経験によって前者を鍛えることで、公共的なテオリアへと導く重要性を説いた。その実践の場が1854年設立の労働者大学の素描クラスであった。1861年のモリス・マーシャル・フォークナー商会の設立は、メンバーのロセッティ、ブラウン、バーン=ジョウンズが労働者大学で教えていた時と重なり、設立年に素描クラスの学生を商会に職工として迎え入れている。ここから訓練の場が、商会の設立へとつながった様子がわかる。同時に商会は実業学校に通う貧困層の少年たちを雇用した。生活の美化のモットーが強調される商会の活動は、ラスキンの説く美的感覚の公共的な側面の体現であり、社会的包摂の実践でもあった。

美の追求と知の探求

——ヴィクトリアン・ソロモンになりたかったD・G・ロセッティ

報告：加藤 千晶(当時：慶應義塾大学・東京外国語大学、現：山梨大学)

ラファエル前派のリーダー、D・G・ロセッティ没後の展覧会評「ロセッティと美の宗教」(F・W・H・マイヤーズ)における指摘(「唯美主義運動」の影響力は科学や宗教の影響力をも凌ぐ)は、ロセッティの同時代の思潮への反応について、重要な示唆を与えている。本発表では、宗教的懐疑を背景としたロセッティの感性の時代精神への反応を、主に彼の詩作品から、彼が愛読したという旧約聖書の「コヘレトの言葉」を参照しつつ考察し、

不可知論的な立場に留まりつつも、存在の意味や真理を追究し続けた詩人の芸術における闘いの過程を明らかにした。初期の“Art-Catholic”と名付けた詩作品で宗教の審美化を試みた彼は、中期以降の詩において、人知を超える大きな存在に自らの有限の生命を委ねたいという希求を表す。知の探究、現世の感覚を超えた時間の重層性など、「コヘレトの言葉」とロセッティの詩の共通点はまた、唯美詩が20世紀詩への道を開いたことを示している。

唯美派建築とヴィクトリア朝期イギリスの時代精神

——建築家たちがめざした実用と美の総合——

報告：近藤 存志(フェリス女学院大学)

19世紀イギリスでは、建築の設計・実現を芸術行為とは一線を画した経済性と効率を重視した行為として捉える傾向が現れた。こうした〈芸術としての建築〉を否定するような傾向に対しては、ある種の反動が現れ、建築の装飾的側面に焦点を当てた意識的な芸術性の強調を図る態度——唯美派建築——が生まれることになった。18世紀中葉以降、イギリスでは、美的趣味の主観性が広く認識され、建築に実現される美の表現が各段に多様化していた。建築美を自由に創造的に捉え、多彩な表現を積極的に実験する傾向は、建築の実用性と機能性を追求しつつ、唯美主義的芸術趣味に基づく装飾を徹底的に採用して、〈実用と美の総合〉を図る唯美派建築を生み出すことになった。そしてそうした〈美しい建築〉は、「芸術家具」と同様、功利主義の視点から旺盛な建築活動が展開された時代とその時代精神に対する対抗的な反応として、19世紀後半のイギリスに輝きを放つことになった。

シンポジウム2

「ヴィクトリア朝の書簡——国政から私信まで」

司会：川崎 明子（駒澤大学）

ヴィクトリア朝に形成された近代的郵便制度は、植民地統治や自由貿易主義の促進という公的領域に貢献するのみならず、人々の日常においても気軽に私信を送受信するという新しい習慣を作った。個人から個人へという形態をとる書簡は、常に公的な領域に開かれる可能性をはらんでいた。本シンポジウムでは、まず、君主という最大の公人であるヴィクトリア女王を取り上げ、大臣や植民地総督のみならず海外王室に嫁がせた王女たちに書き送った大量の書簡が、政策決定にまで影響した過程を考察した。次に、郵便配達されるという点で郵便物でもある新聞という公器において、有名無名の読者が編集者に宛てた「手紙」という形態をとる投書欄を、『タイムズ』紙の例を中心に検討した。最後に、シャーロット・ブロンテが書いたラブレターの可能性と限界を、作品中の例も参照しながら分析するとともに、編集者への新作の原稿の送付がラブレターの発信と相似した点についても論じた。

ヴィクトリア女王 ——大英帝国のゆくえを決めた書簡

講師：君塚 直隆（関東学院大学）

大英帝国に君臨したヴィクトリア女王（在位1837～1901年）は筆まめな君主であった。本報告では、女王が書簡を送った相手を三つに分け、それが大英帝国の舵取りにとっても重要な意味を持っていたことを紹介した。まずは叔父でベルギー国王のレオポルド1世と長女でのちにドイツ皇后となったヴィクトリア。2人とはそれぞれの国内情勢と国際政治に関する極秘情報がやりとりされた。二つめに閣僚や総督、陸海軍司令官らとの書簡では、対外戦争に関して指示したり、国内での政党政治に介入する女王の姿が浮き彫りとなった。そして最後に孫でドイツ皇帝ヴィルヘルム2世や孫の配偶者でロシア皇帝ニコライ2世に宛てられた書簡。こちらは19世

紀末の国際政治の指南役ともいべき女王の姿を如実にあらわしている。ウィンザー城内の王室文書館に残るこれらの書簡からは「君臨すれども、統治せず」というイギリス立憲君主制の裏側に隠された真実の一端が明らかにされる。

“To the Editor of the Times” から見るヴィクトリア朝の英国

講師：小宮 彩加 (明治大学)

新聞には、1712年から1855年に廃止されるまで様々な税金が課せられていたのだが、納税の証として新聞に押されていたスタンプが郵便代をも兼ねていたため、長いこと新聞は郵便物として扱われていた。本報告では、新聞の「郵便物」や「手紙」としての側面を取り上げた。特に注目したのは、ヴィクトリア朝時代に大きな力を持っていた『ザ・タイムズ』の名物コーナー“Letter to the Editor”である。1785年創刊の『ザ・タイムズ』も、その投書のコーナーも、名編集長トマス・バーンズの時代に大きく発達した。読者達から送られてくる手紙と、それらに対する編集長の社説のやりとりが、いかに世論を動かしていたか。公開絞首刑に関するディケンズの投書や、クリミア戦争時の戦争特派員からの手紙(記事)や兵士からの投書などの例を挙げながら考察した。

ブロンテ姉妹のラブレター —— 恋愛における手紙の功罪

講師：川崎 明子 (駒澤大学)

本報告では、地方に在住しながら1840年代の郵便改革の多大な恩恵を受けた人物としてブロンテ姉妹、特に多数の手紙を書いたシャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-55) を取り上げ、ラブレターをめぐる公私の独特な関係を明らかにした。シャーロットの実生活におけるラブレターは、送信したもの、受信したもの、閲覧したものの3種に大別できるが、作家としてのキャリアに最も貢献したのは、留学先のブリュッセルの恩師

エジェに帰国後に手紙を書いた経験である。その現存する4通のラブレターの特徴を、テキストを分析するとともに、適宜姉妹の小説における手紙の扱いとも関連付けながら考察した。さらに手紙をめぐる公私の関心の興味深い例として、エジェとの文通を諦めた後も、出版社に作品刊行を依頼する手紙や、片思いしていた出版社社長に送った作品原稿が一種のラブレターとして機能したことにも議論を広げた。

III 特別講演

帝都に響きわたる咆哮

—— 近代ヨーロッパの動物園・水族館文化 ——

溝井 裕一（関西大学）

本講演では、19世紀～20世紀初頭の西欧の動物園・水族館をめぐる文化を扱った。最初に、これらの施設の原型にあたる前近代の動物コレクションや養魚池について概観した。その上で、パリやロンドンにおいて近代動物園が誕生したプロセスや、異国風飼育舎、没入型水族展示、異民族展示など、多種多様な展示形態が生まれていったことを解説している。またこうした展示の背景には、異国の動物を収集・展示することで軍事的・外交的・経済的パワーを示そうとした西欧各国の人びとの思惑がからんでいたこと、動物園における異民族展示が、当時人気を博していた「進化論」をベースとして実施されていたことにも触れている。締めくくりに、動物園に革命をもたらしたとされるハーゲンバック動物園をとりあげ、狭い檻を排した飼育法を導入しただけでなく、実物大の恐竜像を置くなど、過去から現代までの世界を展示しようとした野心的な施設であったことを紹介した。